

一日本女性へ米富豪の友情

沼津市に愛の病院

一万ドルの資金を提供

沼津海軍千本松原に隣り近い場所、一色の病院が建てられている、二階建て三百坪スマートなクリ新しい表札には「美穂病院」と目

本字とローマ字で刻まれて、もう開院の日も間近い、かつてアメリカに留学した一日本女性へ寄せるアメリカ一老富豪の友情——これ

は「愛の病院」物語……



写真は完成した美穂病院とダンフォース氏、田子政子さん

物語のヒロインは沼津市千本の須田寛作医師の長女で、神戸製鋼社員田子達彦氏(30)の夫人政子さん(31)である、昭和八年同志社女学院出身で、随分早稲立末吉高女で英語と音楽を教えていたところ、同志社時代の教師ミス・レントンの推薦で、セントルイスのウイリアム・H・ダンフォース氏の奨学資金(年三百ドル)を得て昭

和十一年に渡米、ケンタッキーの「さ」を語る故事を書いた、何を期待するわけでもなかったが、書くことが出来たのだ、ところが、思いもかけず、夫人がなげいて「さ」といふニースがダンフォース氏の目に入り、二十三年一月セントルイスから安否をたずねる手紙が来た、これが夫人の一家にとつて「幸運の手紙」となつた、夫人からのくわしい返信に抗議して「病院を建てる資金として一万ドル贈る」と、夢のような知らせが舞い込んだ、ダンフォース氏にこつては政子さんは単に奨学資金を与えただけの一日本女性に過ぎなかつたのである

しかもその年の七月にはダンフォース氏から頼まれた、同志社教育顧問として来日中のミス・シイペリーがわざわざ沼津に現地視察に訪れ、病院建設費はぐんぐん進められていつの間にか、一万ドルの金は総司令部の援助で直接奨学資金となつた、そして

昨年秋、政子さん親子の夢は実現して懐かしい元の故地に感激のクイ音がひびいた、こうして各科診察室、レントゲン、手術室、研究室に三室の病室と五十床のベッドを備えたアメリカ方式病院、財団法人「美穂病院」が生れたのである

田子政子夫人の話 本場に訪のようです、留米中私たちは毎年夏、ミシガン湖のほとりでキャンピングをしましたが、ダンフォースさんはかならずそこへお出でになつて一しよに生活し、いろいろお話しされました、ダンフォースさんはいまも会社の人たちに毎月曜日にはメッセージを出して、精神的な指導を続けていますが、よく日本訪問のさいの富士山の印象を語り「青年は富士山を見るように高いところを見なさい」と説いていました、病院の名を決めるときにも、土地柄もあるので富士山にちなんで「美穂」をとり、ダンフォースさんへの感謝をさげました

おけさ天然色でハワイへ行く

「相川翁」佐渡のおけさおどりと、佐渡を訪れた、相川の名所千尋で立派な村田文三老翁の行く——全国各地の名所をめぐつたおけさおどりに目をみはり、自分たちだけで、このおどりを独占するのはおしい、ぜひハワイ在住の邦人達に佐渡ケ島の美しい情緒を立ちよつて歌つた佐渡おけさに紹介したい、と十六ミリの録音機、ぜひ本場のおけさを見たい、何映画におさめた

